

# 琉球大学学術リポジトリ

[フォーラム] 地図からはじまる社会科授業：  
沖縄県児童の地理的視野を拡げるために (特集  
地理教育)

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺本, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017675">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017675</a>

## 地図からはじまる社会科授業 —沖縄県児童の地理的視野を拓げるために—

寺本 潔

(玉川大学教育学部)

### I 問題の所在

沖縄県を度々訪れて感じることは、この島の地理的特性から想像される人々の持つ独特なメンタルマップ(頭の中の地図)である。とりわけ沖縄島は南北110kmにもおよび、しかも狭い場所では東西幅がわずか4km程度しかない、著しく細長い島であるという点だ。メンタルマップ形成の本土との違いは、そこに住む人々の面積感覚や高低感覚、それに距離感覚にあるのかもしれない。とりわけ、児童にあつては大人以上に経験知や獲得する情報が乏しいため、在住の土地から空間イメージが生じがちで、その土地固有の知識(インジニアス・ナレッジ)の影響を受ける。

インジニアス・ナレッジとは、人間がその土地に生まれ育っている過程において自然に身につける知識の体系であり、土地勘なども含まれる。この点についての議論は2007年度に関西大学で開催された2007年日本地理教育学会大会シンポジウムで社会科フィールドワーク力という概念を設定し、筆者がその中で用いた。その折の発表要旨文を下記に一部再掲載したい。「社会科でフィールドワークが軽視されている。手間がかかる、安全管理ができない、指導に自信がない、などの理由で単なる施設見学に留まっている。地形や植生、土地利用などを歩いて実感させたり、距離尺度と方向感を定着させたりできていない。このままでは社会科におけるフィールドワーク力を育成できないのではないだろうか。フィールド体験から得られる知は、まさに総合的である。地理スキルの基盤を形成する地点の認知、地点と地点の間の経路認知、地点周辺にある複数の地点との位置の関係など、アンカー・ポイント理論に基づく空間認知でさえ、うまく育成できていない状況が日本の教育界には横たわっている。地図読みの能力もフィールド体験が不足しては伸びてこないことは明白である。(中略)社会科の学習内容はこのように社会見学などのフィールド体験が基盤にあつて初めて理解が及ぶ性質のものであり、見学・調査は理科の観察実験学習に相当する意義を有している。」

この学会発表に際し、図1の概念図を提示した。A層にあたる空間概念が形成されていることが基礎であり、その上でB層のその土地固有の知識が積み重なっていると筆者は考えている。沖縄県児童に関しても同様であり、まずは、A層に属する資質や学力をフィールド体験や小旅行など実地の経験を通して培う必要があるのではないだろうか。

本土では、大都市圏に住む児童でさえも数十a程度の水田なら11歳になるまでに様々な経験を通して数回は見たことがあるはずである。彼らでさえ稲穂が実り、感覚的に広い水田で稲作が行なわれている風景をイメージできる素地が育っている。しかし、沖縄県の児童に至っては久米島など水田が多少みられる島を除けば、広い水田風景は、目にしないのではないだろうか。土地の高低に関する感覚も同様である。県内の標高を持つ石垣島の於茂登岳でさえ526mしかない。本土の児童であるなら、小旅行の折に標高1,000m級の山を遠望した経験はある。たとえ目にしたことがない場合でも駅に張られている雪山のポスターや登山雑誌の表紙、ローカルテレビ映像などで身近な山岳名をいくつかは知っている。沖縄県の児童に至ってはその身近な感覚とでも言おうか、山岳名に触れる機会が乏しく、標高の高い山岳をイメージすることは難しい。ましてや日本アルプスを指す「日本の屋根」や富士山の高さについては感覚的にも想像しづらいはずである。5年社会科で習う「日本の工業」単元で登場する主な工業地帯に関するイメージも同様である。那覇市から沖縄市までの都市化したエリアは確かにインジニアス・ナレッジとして保有しているが、コンビナート施設や工場群が立ち並んでいる工業地帯としてのイメージは形成されにくいのではないか。

一方、距離や方位感に至ってはかなり誤認も多いだろう。沖縄島の南北の距離感(那覇市から辺戸岬までドライブした経験)が保有されていれば、それを約100kmとしてメンタルマップの尺度として用い、「沖縄島の南北の長さの○倍で鹿児島に着く」「鹿児島までの距離の○倍で東京に着く」という具合に尺度を伸

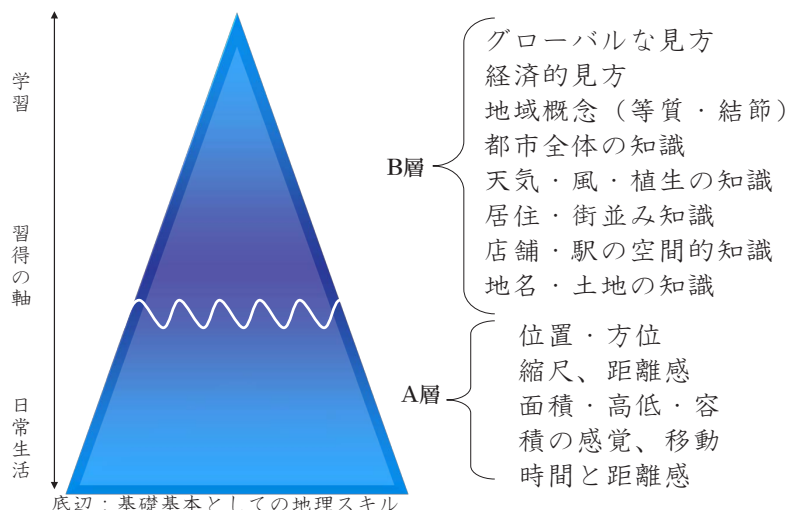


図1 社会科フィールドワークで身に付く地理スキルの概念図

ばして日本列島をつかませる学習指導ができる。反面、その距離感覚さえもつかめていない場合は日本列島の大きさや関東平野の広ささえもほとんどイメージできない。

つまり、沖縄県児童の国土に関するメンタルマップは本土の児童以上に制約が横たわっている。確かな国土イメージを養う上でも教師向けの社会科研修機会を沖縄地理学会などが用意し、適切な指導法を広める必要がある。その解決策の第一は地図を積極的に用いることではないだろうか。第5学年の国土学習や産業学習、第6学年の歴史学習などの機会を通して国土の地理的イメージや国土と沖縄県の位置関係、国土の面積・方位・高低感に関するメンタルマップを確実に形成できるように努めていく必要がある。こういった沖縄県児童が持っている地理的視野を正しく養っていくための提案を述べてみたい。

## II 北海道との比較による気候と暮らしの単元指導

### (1) 「寒い地方の暮らし」の扱い

国土の多様な自然環境と暮らしの違いをつかませるための典型単元がある。現行の指導要領では第5学年に位置付けられているが、新しい指導要領では第4学年でも一部扱える。筆者が案出した単元名は「比べてみたらこんなに違う沖縄県と北海道」である。準備として次のものが用意できればより効果的である。

- ・トレーシングペーパー
- ・地図帳
- ・北海道地方のある公立小学校の年間行事日程表
- ・海開きや雪中運動会の写真
- ・一般住宅の屋根の写真

### (2) 指導のステップ

これらを次の4つのステップで児童に提示することで児童の視野を広げ、沖縄県と大きく異なる北海道の気候や面積の違いを理解させることができる。

- ステップ1 「北海道に行ってみよう！－緯度くらべー」（とおい・さむい）

「今からこのクラスで北海道に行きたいと思います。地図帳を開いて私たちの住む沖縄県を指で指して下さい。さあ、那覇空港から飛び立ちますよ。→日本列島の上空をあたかも飛行しているかのように語りかける。福岡空港乗換というスタイルで児童の1列を立たせて読み取りをつぶやかせる→さあ、津軽海峡を渡りいよいよ北海道です！→千歳空港という空港に着きました。遠かったね。→那覇空港から千歳空港まで飛んで来ました。飛行機は海に引かれている横の青い線（緯線）を何本横切りましたか？」と発問する。その後、地図帳で次の数字を読み取らせたい。①那覇空港のすぐ南に北緯26度の線を発見させる。②千歳市のやや北に北緯43度の線を発見させる。その後、両方の緯度の数字で引き算をする。「緯度の差で17度も差があるんだね。」（ここで緯度の意味を教えると良い）

- ステップ2 「北海道と面積を比べてみよう！」（ひろい）

沖縄島＋八重山の厚紙で北海道と面積比較を試みる。また、『地図帳』の巻末統計から沖縄県と北海道の面積を数字で書き出し、割り算をすることで沖縄県の37倍の広さが北海道である事実を把握させる。広い北海道の大まかな土地利用について1つの場所を取

り上げて確認させる学習も効果的だろう。特に、乳牛の絵記号に着目させたい。帯広市の市役所マークを中心に20 km四方の正方形を地図帳に記入（もしくはトレーシングペーパーを重ねる）。「20 km と言えば那覇市から石川市までの距離があります。」「その距離の四方に乳牛がたくさん放牧されていることをイメージできるかな？」と解説し、北海道の土地の広さを実感的に扱う。

●ステップ3「冬休みを比べよう！」（みじかい）

長い北海道の小学校の冬休みに着目させる。特に、雪中運動会に興味を持たせる。どうしてこの時期にこの行事があるのか、札幌雪まつりなども紹介し、北国の人々が厳しい気候の中でも暮らしを楽しんでいる事実を知る。

●ステップ4「住宅を比べてみよう！」（あたたかい）

住まいの写真やイラストに着目させる。北海道の住宅の室内はかなり暖房が効いていて快適であることに気づかせる。沖縄の住宅が長いひさしと穴あきブロック、屋上の水タンクが特徴であるが、北海道は屋外に設置されている灯油タンクと煙突、断熱剤入りの壁、二重の玄関、高い床下などが特徴である。これらの4つの指導ステップを活かしつつ、自分たちの住んでいる沖縄県の特性の理解につなげると良いのではないか。

### Ⅲ 地理的視野を広げるこれからの社会科地図指導

これからの社会科地図指導を構想するにあたり、電子黒板が普及する時代が到来すれば、GISソフトや多様な主題図の活用、複数の地図を重ねて提示するレイヤー地図指導、手作り環境地図の発表会などダイナミックな展開が期待できる。反面、様々な事情で学校現場において、フィールドワーク（現地調査や見学）学習が低調になりかけている。理科が実験や観察を魅力アップの手段として再評価しつつある中、社会科は見学や調査といった実体験学習がどうしても欠かせない。今一度、本物の社会事象が持つ魅力を再評価し、決して社会科を教科書や地図帳、液晶画面を読み取るだけの教科にしない。社会科の本質は、現実社会の中にある。沖縄県児童の地理的視野を広げていく上で筆者にできることがあるのなら、大いに支援・協力したい。

### 文 献

寺本 潔著（2002）：『教材発見！町ウォーキングー商店街から近代化遺産まで』明治図書。

寺本 潔・嘉納英明編（2002）：『風土に気づき→地域を発見する総合学習ー沖縄からの提案ー』明治図書。

寺本 潔編（2007）：『社会科におけるフィールドワーク指導技術育成プログラムの研究』（文部科学省分かる授業実現のための教科指導力育成プロジェクト報告書）愛知教育大学寺本研究室。